乳癌検診についてのQ&A

ご自身やご家族で特定の年齢に達した方に対して、「がん検診無料クーポン券」が送られてくることがありませんか？これは、がんの早期発見と健康の保持増進を目的として各市町村が実施するがん検診を無料で受診できる制度によって送られるものです。せっかく「無料」なので、このクーポン券を有効に利用したいものですが、がん検診とはどんなものなのでしょうか。今回は、がん検診のなかでも女性に最も多いがんである「乳がん」の検診についてお聞きします。

なんのために乳癌検診をうけるのですか

はじめにわが国での乳癌の罹患状況ですが、1年間におよそ54,000人弱の方が新たに乳癌に罹患されています。また、この数は年々増加傾向にあります。部位別で見ると乳癌は女性に最も多いがんとなっていて、特に40～50歳代の働き盛りの方ががんでなくなる原因の最も多いものとなっています。

その乳癌による死亡を減らすという目的で有効であることが科学的に確認されているのが乳癌検診で多くの先進諸国では、日本に先立ってマンモグラフィーによる乳癌検診がおこなわれています。アメリカでは40～64歳の女性の50%、イギリスでは50～70歳の女性の70%以上がマンモグラフィーを受診するとされています。その結果、欧米では乳罹患率は高いのですが、乳癌による死亡率は減少し続けています。それに比べて日本では、乳癌検診の受診率は20～30%程度で、その結果、乳癌の罹患率の増加に比例して乳癌死亡率も増加し続けています。乳癌による死亡を減らすには日本でも検診の受診率を高めていく必要があります。

乳癌検診ではどんな検査をするのですか？

現在の乳癌検診の国際標準は、マンモグラフィー検診です。マンモグラフィーとは、乳房X線撮影のことで検査時に乳房をできるだけ平らにして撮影するため、多少の痛みがあります。さわることのできないような小さな乳癌も発見することができ、特に石灰化のある乳癌の発見が得意です。検査の感度（がんのある人を正しく診断できる精度）は、80～90%とされています。

ただし、弱点もあって30歳代といった若い方の乳癌発見率は若干低下します。

検診ではマンモグラフィーと併せて、超音波検査、視触診が補助として行われます。

視触診は以前からも行われていたもので医師が乳房を診察して〝しこり〟の有無を判断する検査です。触診で発見できるものは、ある程度大きな〝しこり〟になりますので視触診単独では、検診としての効果はありません。

乳房超音波検査は超音波を使って乳房の病変を検査する方法です。マンモグラフィーと同じように触診では発見できない小さい〝しこり〟を発見することもでき、マンモグラフィーが苦手とする乳腺の発達した人や、若年者の検査に適しています。ただし、超音波による乳癌検診が疫学的に有効であるとする根拠は今のところは出ていません。

どのような人が乳癌検診を受けるとよいのでしょうか

検診の対象は症状のない人です。無症状のうちに乳癌を発見し治療することにより乳癌による死亡のリスクを軽減することができます。40歳以上の女性は、1～2年に1回、乳癌検診を受けるのがよいとされています。

〝しこり〟や乳頭分泌などの自覚症状がある方は乳癌検診を受けずに直接【乳腺外科外来】を受診してください

乳癌検診で要精密検査となったら

乳癌検診では基本的に異常があるかないかを判断するだけで治療が必要かどうかまでは判断されません。したがって、自覚症状がある方や検査で異常が見られる場合は精密検査を受けるよう指示されます。マンモグラフィーと視触診の組み合わせによる検査では、約8%の方に精密検査が必要という判定がなされますが、そのうちで精密検査を受けて乳癌と診断されるのはおよそ3～4%（全体の0・3%程度）といわれます。

要精密検査となった方でもほとんどは良性の病気や異常なしであるということなので直ちに心配することはないのですが癌検診は、「癌がある」、「癌がない」ということが判明するまでのすべての過程を含めて考える必要があり、途中で精密検査や治療を受けない場合は、癌検診の効果はなくなってしまいます。精密検査が必要と言われたら、必ず受診しましょう。

乳癌検診で異常なしだったらどうしたらよいのでしょうか

基本的に1～2年に1回の受診をお願いします。ただし、検診と検診の間に乳癌が見つかることもあり、これを中間期乳癌といいます。受診して異常がなかった場合でも月1回程度の自分で乳房を触ってみる自己検診をおすすめします。新たに〝しこり〟に触れた場合には、速やかに【乳腺外科外来】を受診するようにしてください。

今月の先生

乳腺外科部長・外来化学療法部長
中田琢巳 先生
主な資格、認定
日本外科学会専門医
日本乳癌学会専門医
卒業年、主な職歴
平成3年岐阜大学医学部卒
岐阜大学医学部附属病院第2外科